

インドネシアの小さな体験

近藤節夫(四回生)

大きなザックを背負い、昨暮私はひとりで東南アジア五ヶ国を歩いてみました。とかく陽のあたらない、それでなくても経済の遅れた貧しいこれらの国々の裏面を、一般市民の生活を通して、何でも見て、大いに吸収してやろうと、まあ、こう考えたのです。

実際、行ってみて驚きました。私なりにそれ相当の予備知識は持っていたのですが、知らないことの多いのに、自分の不勉強を痛感し、同時に、大いに発奮し、極めて意義のある旅行でした。

特に、反スカルノを叫ぶKAMI(インドネシア学生行動戦線)のデモに遭遇し、国際的、国内的にも揺れ動く、インドネシアの苦悩する姿を目の当たりにして、オランダ植民地時代から、今日の、また将来の、この国の姿を思い、資源豊富なこの国の貪しさということについて、私なりに一つの結論を得ました。更に、動乱の地サイゴンへ飛び、「本物」の戦闘シーンにはお目にかかれませんでした。さして大きくもない、ここサイゴンの街角にあふれんばかりの若い兵士たちの姿や、金網をめぐらした異常なたたずまいの中に、ただならぬ戦時色を感じ、個人的にも銃口を向けられたり、がんぜない子供にモデル代を求められたり、戦争による目に見えない罪悪の一端を感じ取ったのです。

私の身軽ないでたちが、幸いにして現地の

人たちにも親近感を与えたのでしょうか、当地で多くの友人を得ることができ、彼らの目を、耳を通して、私は大いに教えられ、考えさせられました。ただ、ここで私の考えなり、見解を述べるには、いささか条件が厳しすぎます。編集者はせいぜい七、八枚以内、ということですから、土台無理な話です。それで、私の体験談の中から印象深いエピソードを二つ三つ書くのにとどめました。

……あれはジャカルタの朝でした。南国の朝の太陽は強烈で、窓からみるジャカルタの町、ヤシの葉の合間にレンガ色の家々の点在するさまは、まさに絵に描いたようです。幼い頃から、漠然と抱いていた南国へのノスタルジアを満たしてくれるに充分でした。

私はカメラをかついで、その中へ入って行ったのです。別に不思議な格好ではありません。が、「善意」ある現地の人から見れば、無防備も無防備で危なくて見ていられないそうです。一見して旅行者と判るといふことは、隙あらばと狙っている現地人には、絶好のカモに映るわけで、私は前もってジャカルタの治安が乱れているということは、それを逆に解釈してむしろ治安が厳しいように解釈していたのです。それに考えの甘さもあって、土地の人の素朴な純真さというものを過大に評価しすぎていました。「貪困」ということを見落としていたので

す。

レンガ色の建物も、傍で見てみると、いかにもくすんで、生活の低さは明らかでした。「貧困」ということを考え併せて、終戦直後のスラム街にでも自分を置き換えてみれば、もっと危険を感じたかも知れません。

……そう、十分も土手の上を歩いたでしょうか。背後からつけてきた若い男に、不意に左腕を押さえられ、一瞬何が起こったか呆気にとられている私をよそに、その男は強引に時計をもぎ取って逃げ去ったのです。しばらくして漸く我に返った私は、咄嗟に「この野郎！」と追いかけようと思ったのですが、自分でも意外なほど冷静で、「カメラも危ないぞ」と気がつき、追うのをあきらめました。ですが、逃げていく素足の男が路地に消えるのを見届けてから、私は急に怒りがこみ上げてきました。その男に対しては当然のことですが、それ以上に私を憤慨させたのは、その男を追いかける素振りすら見せず、周りでただぼんやりと、今の寸劇の一部始終を見ている連中に対してでした。後になって聞いたのですが、こういう連中だつて危ないということでした。彼らも所詮五十歩百歩、スキあらばと狙っていたに違いないのです。

それにしても、白昼人前でこうも堂々と他人の物をかっぱらうことなど、法治国家に住むわれわれ日本人の感覚では、とても考えられないことです。

私にとつては、まったく思いがけない経験であり、屈辱でもありました。同時に、インドネシアの人たちを信用できないということとは、悲しいことでした。

それから私は、金目のものは一切持たず、市内のマーケットへ行ったのですが、観光客

として足元を見られたのでしよう。多数の人相のあまり良くない男たちにとっと取り囲まれ、夕暮れ時でもあり、ベチャ（人力車）に乗ってほうほうのいでホテルへ戻りましたが、そのベチャの車夫にも法外な足代をふっかけられる有様でした。まったく惨々でした。

しかし、すべてがこうだった訳ではありません。ポゴールの農村へ行った時は、現地の警察官と知り合い、その家族の人たちの心からの歓待をうけ、歌を教えたり、逆にジャワ民謡を教えてもらったり、実に楽しいひとときを過ごしたのです。

インドネシアは貧しい国です。特に、人口の密集した首都ジャカルタは極端に貧しく、失業者は巷に溢れています。ここに真因があった訳で、時計強奪の一件にしても、これはもう観光客に対するエチケットとか、マナー云々以前の問題です。この国の経済は、都市と農村の間に大きな断層があります。いい意味では破滅寸前のインドネシアの国民生活を辛うじて支えているのは、都市の窮乏の影響が波及的に農村に及ばないからです。インドネシアの農村が決して豊かというわけではありません。都会の追い詰められたインフレ下の経済に比べてみれば、まだしも救いがあります。従つてこのポゴールの人たちは、私の接した範囲内では、素朴さを失っていませんでした。子供たちも無邪気で別れの時には、本当に見えなくなるまで手を振ってくれました。

さし当つてこの国は、経済の遅れを取り戻さねばなりません。あまりに貧しすぎます。しかしながら、インドネシアが今日の日本の姿にまで追いつくには、相当の歳月を必要とすることでしょう。私はあれを思

い、これを思い、ついこの国の人たちに同情してしまふのです。

私は、このインドネシアでは苦い体験をいくつか持ちました。しかし私が、この国へ心を惹かれるのは、私を知った人たちを含めて、総じてこの国の人たちは、未来へ向かつて前向きな積極性を正直にぶつけてくるからです。私は、そうしたひたむきな態度をみて、明日のこの国に期待するのです。私は相も変らぬ強い日差しの中で、いろいろ振り返ってみました。そして、手前勝手に

こう結論を出しました。現地の人たちを完全に理解するところまではいきませんが、その原因ははっきり言って、インドネシアの民情にある。私の取材活動としては、むしろ珍しい体験をしたことでもあり、決してマイナスではなかったと。そしてこの次、訪れる時は、この国が経済成長の法治国家として私を受け入れて欲しいと念願しつつ思い出多いこのインドネシアをあとにしませんでした。